日常生活における不公正な事象の経験と感情的反応¹

常葉学園浜松大学 国際経済学部 田 中 堅一郎

Experiences of unfair events in daily life and emotional reactions.

Ken'ichiro Tanaka

*Faculty of International Economics, Tokohagakuen Hamamatsu University,
1230 Miyakoda-cho, Hamamatsu-shi, Shizuoka 431-21*

The purpose of the present studies is to examine the relationship between unfair experiences in daily life and emotional reactions toward them.

These studies were also designed to replicate and extend Mikula (1986) and Clayton (1992). In the preliminary study, 45 Japanese subjects were asked to describe typical unfair events in their daily life. The data from this study was compared with that of Clayton's American subjects and those of Mikula's Austrian ones. In the main study, the subjects were presented with 35 unfair events selected from those of the preliminary study, and the subjects were asked to comment on them. The results of the correspondence analysis and the cluster analysis indicated that the subjects related various emotional reactions to the unfair events. In addition, implications of further research on justice and emotions were discussed.

Key Words: emotional reaction, equity theory, inequity, unfair event

日常生活の中で、われわれはしばしば“不当だ”とか“不公正である”と感じた経験をもっている。そしてその経験はしばしば怒り、苦痛、戸惑い、といった感情的反応と深く関連している。こうした見解は、すでにSmith (1790, 米林訳, 1969) において経済的交換における公正が“共感 (sympathy)”によって得られるという論旨に見出せるし、今日でもアージ理論 (戸田, 1992) やコミットメント・モデル (Frank, 1988, 山岸監訳, 1995) で言及されている。そして報酬分配の公正に関する衡平理論 (Adams, 1965; Walster, Berscheid, & Walster, 1976) でも不公平な処遇に対して人は強い否定的な感情反応を示すと仮定されていた。このことは、感情の喚起されやすさを測定する尺度の中に、“不公平な扱い”に関する項目が含まれていることからもうかがうことができる。たとえば、恨み尺度 (Buss & Durkee, 1957) の中に“人生は不公平だとときどき思う”という項目があり、短気尺

度 (Buss & Durkee, 1957) にも“不公平な扱いを受けても気にならない”という項目が含まれている。最近の公正さに関する社会心理学的研究でも、被験者の気分を実験的に高揚・抑制すると公正な分配行動が異なる (O'Malley & Davis, 1984) ことや、被評定者に対する感情によって公正な評価が変化する (田中・瀧本, 1994; Tanaka & Takimoto, 1997) ことが明らかにされた。

一方で、公正さの評価は様々な場面に応じて異なってくると考えられる。すなわち、公正・公平 (あるいは不公正・不公平) をもたらす社会心理学的な文脈も重要な要因である。その重要性についてはこれまで幾度となく指摘されてはいたものの (Deutsch, 1983; Graziano, 1987; Prentice & Crosby, 1987), これまであまり顧みられることなく、公正研究において軽視されていた。だが、ようやく最近になって不公正をもたらす社会的文脈に関連したいくつかの研究

1. 本研究は、常葉学園浜松大学平成6年度特別研究助成金の支援を受けた。

が出てきた。その先駆けともいえるのが、Reis (1984)による公正さの認知に関する多次元的研究であろう。彼は被験者に17の公正規範を呈示し、それに関する様々な評定を行わせて公正さの認知に関する3次元を多次元尺度解析法によって抽出した。その3次元とは、“長期的満足(long-term gratification)－直接的満足(immediate gratification)”, “地位主張(status assertion)－地位中立性(status neutralization)”, そして“自己中心的視点(self-focused perspective)－集団ならびに他者の視点(group/other perspective)”である。その後の多次元の視点からの研究としては、公正な報酬分配を規定する要因(田中, 1990, 1991)や不公正な事象とその対処(Lipkus, 1992)に関する研究がある。またMikulaら(Mikula, 1986; Mikula, Petri, & Tanzer, 1990; Mikula & Schlamberger, 1985)は、彼らの多次元的研究の成果から日常生活で経験した不公正さの類型化を行った。

これら不公正な事象に対する多次元的研究の中で、現象学的分析による成果ではあるが、様々な不公正な事象と感情的反応との関連性が指摘されている。たとえばMikula (1986)の研究では、大学生被験者によって報告された57の不公正な事象に様々な感情的反応が現れており、それらは5つのカテゴリーに分けられた。すなわち、それらは“怒り・激怒・憤慨”“ろうばい・奮い立つ・そわそわする・ドキドキする”“途方に暮れる・絶句する・驚く・当惑する”“絶望する・みじめ・なさないあきらめ”“失望する・悩む・傷つく”であった。またClayton (1992)の研究においても、被験者が第三者の立場から判断しても日常生活での不公正な事象に対する反応は不公正(unfair)よりもむしろ怒り(anger)に関する回答が多くみられた。これらの結果は、不公正と感情反応との密接な関連性を示唆するものである。さらに、EllsworthとSmithの研究(Ellsworth & Smith, 1988; Smith & Ellsworth, 1985)では、感情生起に関わる状況評価次元の一つとして正当性の次元が見出されている。ここでの“正当性”次元とは、状況の

公正さや正当性の程度を評価するもので、主として怒りの生起に関わっているとされる。そしてこのことは、アメリカ人被験者についてだけではなく中国人や日本人被験者においても確認されている(Mauro, Sato, & Tucker, 1992)。

そこで本研究では、これまで行われた公正判断に及ぼす対人感情の影響についての研究と、Mikulaらの研究に代表される不公正事象に関する多次元的研究の成果を踏まえ、以下の点の検討を目的とする。(1)日常生活で経験される不公正な事象を収集し、分類する。(2)不公正事象の分類結果を先行研究と比較する。(3)不公正事象は感情的反応を生じさせやすいのかどうか、そしてどのような不公正事象が強い感情を生じさせるかについて検討する。

予 備 調 査

この調査での第1の目的は、人々が日常生活のなかで経験した不公正(あるいは不公平)な事象を収集し分類すること。第2の目的は、ここで得られた事象を本調査の呈示課題とすることである。

方 法

被験者 東京都内の看護専門学校の女子学生45名。

手続き 被験者はまず、以下のような教示を受けた：“あなたがこの頃経験した出来事で、“これは正しくない”とか“これは不公平だ”と思ったものを具体的に思い出してみてください。次に、その一例を下の枠内に記述してください。”

被験者がもしそうした経験をもたない場合は、彼らが見聞きした不公正(あるいは不公平)な事象を記述するよう教示した。その後、被験者は自分の書いた事例について、16の形容詞(“正しい”“不公平な”“正当な”“根拠のある”“明るい”“暖かい”“好きな”“気持ちよい”“不愉快な”“感じのよい”“憎たらしい”“厳しい”“思いやりのある”“不真面目な”“ねたましい”“とげとげしい”)がどのくらい当てはまるかを、5段階(1:ほとんど当てはまらない~5:かな

り当てはまる)で評価した。これらの評価語のうち、公正さを表す4語(“正しい”“不公平な”“正当な”“根拠のある”)は著者によって任意に選ばれ、残りの12語は井上・小林(1985)のデータを参考に選定された。

結 果

不公正事象の分類 45名の被験者によって報告された45個の不公正事象が集められた。社会心理学における公正研究の枠組みに従ってこれらを分類するのであれば、分配や交換の結果における公正(すなわち、分配的公正)と、分配や交換が行われるまでの過程で何が行われたかに関する公正(すなわち、手続き的公正)の2分類も考えられるが、集められた事象はそのような単純な分類に収まりきれないほど多様な内容をもっていた。そこで、これらをMikula(1986)やClayton(1992)の分類カテゴリーに準拠して[状況][地位の差異][不公正の類型]で整理した(Table 1)。**[状況]**とは不公正な事象が起こった場所がどこかについてのカテゴリーである。**[状況]**の分類項目のうちの“公共”はショッピング・センター、公共交通機関といった人々が集まる公の場であり、“社会的”は友人との相互作用に関する事象である。**[地位の差異]**とは、不公正な事象が生じたときの相手と自分との社会的地位に関するカテゴリーである。**[不公正の類型]**とは、不公正な事象がどういった内容であったかに関するカテゴリーである。

本研究の分類結果について、先行研究の結果との比較を行った。ただし、分類カテゴリーのうち**[状況]**と**[不公正の類型]**については2つの先行研究の分類項目に相違がある。すなわち、それらの相違点とはClaytonの研究における**[状況]**の中に“下宿・寮”という分類項目がないこと、そしてMikulaの研究における**[不公正の類型]**の中に“不適切な報酬/認識”と“不公平”という分類項目がないことである。そこで、**[状況]**の分類結果については本研究とMikulaの研究との比較を行い、**[不公正の類型]**の分類結果については本研究とClaytonの研究との比較

Table 1
本研究と先行研究における
不公正事象の分類カテゴリーと分類頻度

	Clayton	Mikula	本研究
[状況]^b			
学校……………	14 (41.2) ^a	18 (31.6)	11 (24.4)
家庭……………	3 (8.8)	14 (24.6)	4 (8.8)
職場……………	0 (0.0)	8 (14.0)	12 (26.7)
下宿・寮……………	—	5 (8.8)	5 (11.1)
公共……………	9 (26.5)	5 (8.8)	6 (13.3)
社会的……………	5 (14.7)	6 (10.5)	3 (6.7)
行政機関……………	0 (0.0)	1 (1.8)	1 (2.2)
不特定……………	3 (8.8)	0 (0.0)	3 (6.7)
[地位の差異]			
被験者が下位……………	24 (70.6)	42 (73.7)	27 (60.0)
平等……………	10 (29.4)	15 (26.3)	18 (40.0)
[不公正の類型]^c			
不当な批判……………	7 (20.6)	18 (31.6)	2 (4.4)
不公正なランクづけ…	0 (0.0)	14 (24.6)	4 (8.9)
不適切な報酬/認識…	4 (11.8)	—	6 (13.3)
不当な処遇……………	4 (11.8)	2 (3.5)	7 (15.6)
理不尽な要求……………	4 (11.8)	2 (3.5)	6 (13.3)
不公平……………	7 (20.6)	—	7 (15.6)
その他……………	6 (17.6)	21 (36.8)	11 (24.4)
不公正ではない……………	2 (5.9)	—	2 (4.4)

a. 括弧内の数値は%。分類カテゴリーごとに比率が算出されている。

b. **[状況]**カテゴリーにおける“下宿・寮”は、Mikulaによる分類項目であるが、Claytonには存在しない。

c. **[不公正の類型]**カテゴリーにおける“不適切な報酬/認識”と“不公平”および“不公正ではない”は、Claytonによって新たに加えられた項目で、Mikulaには存在しない。またMikulaによる分類項目にいくつか“その他”に組み入れられている。

を行った。まず〔状況〕のカテゴリーについて、本研究とMikulaの研究の分類結果を χ^2 検定で分析した。その結果、〔状況〕の分類項目に関して本研究とMikulaの研究との間で人数の偏りは有意でなかった($\chi^2(7)=10.87, p>.10$)。次に〔地位の差異〕のカテゴリーについては、2つの先行研究と本研究の分類頻度について χ^2 検定で分析した。その結果、“被験者が下位”と“平等”の頻度は3つの研究間で有意な差は見出されなかった($\chi^2(2)=2.28, p>.10$)。さらに〔不公正の類型〕に関しては、本研究とClaytonの研究の分類結果を χ^2 検定で分析した。その結果、〔不公正の類型〕の分類項目に関しても本研究とClaytonの研究との間に人数の偏りは有意ではなかった($\chi^2(7)=8.50, p>.10$)。以上の分析結果から、本研究の分類結果は先行研究と比較して明確な差はないといえる。

ちなみに、“不適切な報酬／認識”は、社会心理学では古典的なテーマともいえる報酬分配における不公平を表していると考えられるが、本研究での全体に占める比率は13.3%であった。報酬分配の問題以外では、えこひいきによる不当な処遇が全体に占める割合は15.6%となった。また、Mikula et al. (1990)の研究では対人的な行為や対処に関する事象（たとえば“約束を破った”“他人の気持ちや要求に耳を貸さない”等）が多かったが、本研究でも内容からいって、これらに相当する事象は全体で35.6%を占めていた（16事例、具体的には“挨拶しても無視された”や“店員の会計への対応が不適切だった”等）。

不公正事象に対する評価 45名の被験者による不公正事象についての16の評価語へ評価値は、まずそれらの値をもとに非類似度行列を作成して、多次元尺度構成法によって解析された。分析にはSPSSのALSCALを用いた。分析の結果、2次元解までのストレス値は.086、説明率は97%であった。Fig. 1に分析結果が示される。評価語の布置を見ると、公正さ次元の両極を代表する形容詞、すなわち“正しい”“不公平な”と、それ以外の感情的評価を表す形容詞とは必ずしも

独立していないことがわかる。たとえば、“不公平な”は“不愉快な”といった感情を喚起し、“気持ちよい”“感じのよい”“暖かい”“好きな”と対極にある。一方、“正当な”と“根拠のある”は、“ねたましい”“とげとげしい”や“不真面目な”といったネガティブな感情と対極的な布置を示している。これらの結果は、公正さと感情的評価が“好感・親和—不公平”と“正当性—親しみにくさ”の2次元から構成されていることを示している。

Fig. 1. 多次元尺度構成法による不公正事象に対する評価項目の分析結果

本調査

予備調査によって日常生活の中での様々な不公正な事象が集められた。そしてそれらに対する被験者の評価を分析したところ、公正ならびに不公正の評価と感情的評価との関連性が強いことが示された。だが予備調査では、被験者によって報告された不公正事象の内容が多岐にわたっていたにも関わらず、それらに対する被験者の評価方法はわずか16個の評価項目へ回答するものであり、被験者の多様な反応を検討する

には手続き的に不十分であったといわざるを得ない。さらに評価の対象が自分の経験した事象だけであったことも、評価の客観性という点で問題がある。そこで、本調査では予備調査で集められた様々な不公正な事象を被験者に呈示し、それらを第三者の立場から自由にコメントさせる。その結果を分析することによって、不公正事象と感情的反応との関連性があるのか、さらにはどのような不公正事象が強い感情を生じさせるのかといった点について検討する。

方 法

被験者 浜松市内の大学の学部生66名（男性：50名、女性：16名）。

手続き 予備調査によって得られた不公正な事象のうち、類似した内容を除いた35の事象が選ばれた（事象の内容については付録参照）。まず被験者にそれら35の事象が呈示され、あくまで第三者としての立場でこれらの事象をすべて読み、各々の事象について最初に思いついた言葉を1つもしくは2つ示すように教示された。被験者の回答時間は35分で、時間内に思い浮かばない場合には“？”印を記入するよう教示した。

結 果

まず35の事象に対する反応語を頻度の多い順に整理した（Table 2）。これらの反応語のほとんどが被験者の感情を表す言葉である。特に、強い感情を示す言葉が上位にランクされている（例：腹が立つ、頭にくる／怒る）。また、“むかつく”が圧倒的に多いことは、被験者が比較的若年層であったことを象徴的に表している。“不公平”は18位にランキングされているが、それ以外の公正さを表す反応語はきわめて少なかった。

次に、反応語のうちの高頻度上位20語について、各事象で頻度を集計してクロス表を作成し、それをコレスポンデンス分析（Greenacre, 1984）によって解析した。分析にはSPSSのCATEGORIESが用いられた。分析の結果、寄与率は第1成分： $\lambda_1 = .254$ 、第2成分： $\lambda_2 = .166$ 、第

Table 2
不公正事象に対する反応語の頻度

順位	反 応 語	順位	反 応 語
1	むかつく (361) ^a	11	おかしい/疑問だ (53)
2	かなしい (207)	12	いやだ/いやな (50)
3	仕方がない (193)	13	さみしい (46)
4	ずるい (167)	14	どうして/なぜだ (36)
5	腹が立つ (122)	15	気にならない (34)
6	かわいそう (79)	16	不快/不愉快 (33)
7	頭にくる/怒る (78)	17	あきらめ (31)
8	うらやましい (70)	18	不公平 (28)
9	くやしい (68)	19	憎い (20)
10	やめる/やめろ (56)	20	きらい (16)

a. 括弧内の数値は出現頻度

3成分： $\lambda_3 = .119$ 、となった。寄与率の減衰状況を考え、ここでは第2成分までを採用した。そして、反応語と不公正事象について第1成分と第2成分の成分得点をプロットした結果がFig. 2およびFig. 3に示される。さらにこれらの結果を詳細に検討するために、反応語と不公正事象の第1成分と第2成分の主成分得点がクラスター分析（Ward法）にかけられた。その結果、反応語と不公正事象は5つのクラスターに分類された。それらはFig. 2とFig. 3の中の破線で示される。

第1クラスターには、反応語では“きらい”“にくい”“やめる／やめろ”“不快／不愉快”“いやだ／いやな”といった被験者の強い嫌悪感を表すものや、“どうして／なぜだ”のように被験者の疑問を示すもの、そして“頭にくる／怒る”“むかつく”“腹が立つ”といった被験者の怒りの感情を表しているものが含まれている（Fig. 2）。不公正事象の内容では、“若い人にはお礼も言わない店員（事象番号：1、事象番号は、付録に示された事象に付与された番号と対応している。以下同様）”“人によって態度を変える歯科医（事象番号：5）”“自分と他の人とに正反対のことを連絡して平気な顔の女性（事象番号：6）”“自分ばかり仕事をさせられた（事象番号：8）”“本人がいないときに悪口（事象番号：16）”“不倫

相手の女性従業員にだけは文句を言わない店長 (事象番号: 26) “時間や日によって機嫌の変化の激しい先生 (事象番号: 30)” といったえこひいき等による対人的な不公正に関する事象, そして “学校側が何の前触れもなく禁止事項 (事象番号: 2)” “電車に乗る順番を待つ列に横から割り込む (事象番号: 9)” “政治家は当選すると公約を守らない (事象番号: 12)” “一般団員を無視して担当の係を幹部が勝手に決めた (事象番号: 31)” といった決定や目的達成までの手続きに関する不公正に関する事象, さらに “レジのキーを打ち間違えた犯人にされた (事象番号: 3)” “差別的賃金を指摘したら辞めさせられた (事象番号: 10)” “他の人より仕事の割り当てが多かった (事象番号: 20)” “私宛の手紙を勝手に開ける (事象番号: 21)” “求人票にかかれた内容とはかなり違う仕事内容 (事象番号: 34)” といった家庭や職場での不当な処遇に関す

る事象, そして “鍵をかけ忘れた部屋から物が盗まれる (事象番号: 33)” の窃盗に関するものから構成されている (Fig. 3)。

次の第2クラスターには, 反応語では “気にならない／気にしない” “ずるい” “おかしい／疑問だ” が含まれている (Fig. 2)。これらの反応語からみると, このクラスターは “狡さ” を表すものといえる。不公正事象の内容をみると “他校に比べて実践的演習がない (事象番号: 4)” “国会議員はまともな仕事をしていないのに高給取り (事象番号: 13)” “まじめに試験を受けて40点, 後でカンニングして90点 (事象番号: 17)” “ずっと座っている受付の仕事と立ちっぱなしでいるリハビリの仕事の時給が同じ (事象番号: 18)” “門限に厳しい管理人は仲のよい人には門限に甘い (事象番号: 28)” “社会人でも兄はお金をもらえて妹の私には小遣いなし (事象番号: 29)” が含まれている (Fig. 3)。

Fig. 2. コレスポネンシ分析とクラスター分析による反応語の布置
(図中の破線はクラスター分析の結果)

Fig. 3. コレスポネンシ分析とクラスター分析による不公正事象の布置
(1～35: 不公正事象の番号。事象の内容は, 付録における番号と符合している。図中の破線はクラスター分析の結果)

事象内容から判断すると、このクラスターは金銭面・待遇面で割に合わないこと、すなわち衡平理論でいえば働かない割には多くの報酬や良い待遇を得ている不公平な状態を意味していると考えられる。

そして第3クラスターには、反応語では“あきらめ”“くやしい”“さみしい”“仕方がない”“不公平”が含まれている (Fig. 2)。これらの反応語から考えると、このクラスターは“むなしさ”を表していると考えられる。不公正事象の内容をみてみると、“持ち物が紛失して全員に対して持ち物検査 (事象番号: 7)”“女性が企業で出世できない (事象番号: 15)”“下級生は試験期間でも掃除する (事象番号: 19)”“宝くじはお金持ちの人が当たる確率が高い (事象番号: 22)”“大きい部屋は兄へ、妹の私は小さい部屋 (事象番号: 25)”が含まれている (Fig. 3)。事象内容から判断すると、このクラスターも待遇面で割に合わない不公平な状態を意味していると考えられる。

さらに第4クラスターには、反応語として“かわいそう”“かなしい”が含まれ (Fig. 2)、不公正事象の内容をみると、“可愛がっていた犬が悪性腫瘍で死んだ (事象番号: 14)”“地位や身分によって先生に対する接し方が違う (事象番号: 24)”“Fさんがみんなを味方にしてDさんを仲間外れにした (事象番号: 32)”“挨拶をしても何も言わない (事象番号: 35)”が含まれていた (Fig. 3)。ゆえに反応語と事象内容から判断して、このクラスターは不公正な仕打ちを受けたことに対する被験者の同情や悲しみの喚起を意味するといえる。

最後に第5クラスターには、反応語として“うらやましい”が含まれ (Fig. 2)、不公正事象の内容では、“アルバイト仲間にはおまけを付けた (事象番号: 11)”“推薦試験に合格した後で遊び回っていた (事象番号: 23)”“ある試験科目の過去出題された問題と解答を手に入れた人が良い点をとった (事象番号: 27)”が含まれていた (Fig. 3)。ゆえに反応語と事象内容から判断して、このクラスターは被験者の羨望の気持ちを起こ

させる事象から構成されていると考えられる。

全 体 討 論

予備調査において、各被験者は日常生活で経験した不公正な事象を想起し、自分が想起した事象を16個の評定項目によって評価した。予備調査で得られた不公正事象はそれらの内容によって分類され、先行研究 (Mikula, 1986; Mikula et al., 1990; Clayton, 1992) と比較された。その結果、いずれの分類カテゴリーにおいても本研究の分類結果と先行研究との間に有意な差は見出されなかった。またMikula et al. (1990) の研究と同様に、本研究においても不当な処遇に関する問題や対人的な問題に関連した不公正事象がかなりの比率を占めた。従って、本研究の被験者 (日本人) から得られた日常生活で経験した不公正事象は、先行研究における被験者 (Mikulaの研究においてはオーストリア人、Claytonの研究においてはアメリカ人) と比較して大きな違いがあるとはいえない。ただし、先行研究といくら異なっていた点としては、統計的には有意でなかったものの、[不公正の類型]において先行研究では比較的多かった“不当な批判”に関する事象が、本研究ではあまり多くなかったことと、[状況]において先行研究ではあまり多くなかった“職場”が本研究では比較的多かったことがあげられる。特に“不当な批判”については、Baron (1993) が言うように、当事者にとって不当であると認知される批判が相手に対する感情的反応を引き起こしやすく、批判した側の言い分が十分に理解されないことが多い。本研究で得られた事象にそのような内容が少なかった理由の1つは、被験者が看護専門学校の女子学生であったことによるのかもしれない。すなわち、彼女たちは日頃から他人の行動や仕事に対して直接相手に意見を述べたり、評価したりすることに慣れていなかったかもしれない。あるいは、もう一つの理由としては日本では欧州に比べて、一般的に相手に直接忠告したり批判することを避けようとする傾向があるからかもしれない。

さらに予備調査では評定項目を多次元尺度構成法によって分析した結果、“不公平な”と対極的な位置にあったのが“暖かい”“感じのよい”といったポジティブな感情を示す項目であり、正当性に関する評価項目と対極的な位置にあったのが“とげとげしい”“ねたましい”といったネガティブな感情を示す項目であった。これらの結果から、“公平－不公平”と“親しみやすさ－親しみにくさ”とが独立した次元で構成されているのではなく、“好感・親和－不公平”と“正当性－親しみにくさ”という2次元で構成されていることが示された。いいかえれば、公正さと感情的評価とが対となって両極次元を構成しているとみなすことができる。このことから考えて、日常生活で被験者自身が経験した様々な社会的事象に対する被験者による“正しい”“不公平な”といった評価は、彼女らの感情的評価ともある程度関連があるとみなされる。ただし、予備調査で呈示された公正に関する項目と感情的評価に関する項目との比率にかなり開きがあった（前者：4項目、後者：12項目）点は、手続きの上でより配慮されるべきであったかもしれない。

本調査では、予備調査で得られた35の不公正事象について被験者による自由な反応が求められた。その結果、本調査での被験者は他者が経験した事象を第三者の立場から評価したにもかかわらず、不公正事象に対する反応語の多くが被験者の感情に関連するものであった。たとえばTable 2に示される反応語の出現頻度では、怒りの感情を示す反応語（“むかつく”“腹が立つ”“頭にくる／怒る”）が上位を占めていたが、それ以外にも“かなしい”“かわいそう”といった哀れみや同情を表す反応語も見出された。反応語出現頻度に関しては、Mikula (1986) においても本研究と同様な傾向を見出すことができる。たとえば、Mikula (1986) の研究では“怒り・激怒・憤慨”のカテゴリーに属する反応語を報

告した被験者は68.4%と最も多く、次いで多く報告された語は“絶望する・みじめ・なさない・あきらめ”のカテゴリーに属するもので(33.3%)、その他のカテゴリーは“途方に暮れる・絶句する・驚く・当惑する” (29.8%)、“失望する・悩む・傷つく” (28.1%)、“狼狽・奮い立つ・そわそわする・ドキドキする” (12.3%) となっていた²。またMikula (1986) とほぼ同様な手法を用いたClayton (1992) の研究では、不公正な事象に対する反応で多かったものは“怒り”（報告された比率：30～38%）であった。本研究の結果とこれら先行研究の結果から、日常生活の中で不公正とみなされた事象は同時に強い感情反応を喚起すると考えられる。

ただし、本研究では不公正（もしくは公正）を表す反応語に関しては、“不公平”の頻度が全体的に少なく、それ以外の言葉（たとえば“正しくない”）は上位にランクされなかった。この結果は、Clayton (1992) の研究で“不公正である (unfair)”という言語報告が全体の12～23%を占めていた結果とは異なっている。このことから、本調査での被験者は不公正あるいは不公平な事象に対していきなり“正しい”“正しくない”という評価を下したのではなく、むしろまずそれらに対して感情的な反応を示したといえる。さらに不公正（あるいは公正）に関する反応語が1つしか選ばれなかったために、結果的には予備調査で見出された公正さ評価と感情的評価についての“好感・親和－不公平”と“正当性－親しみにくさ”という2次元構造を追認することは不可能となった。

次に、本調査でのクラスター分析による分類結果からどのような不公正事象が強い感情を喚起するかを検討する。まず、第1クラスターは特に強い情動を表す反応語（例：“頭にくる／怒る”“むかつく”“腹が立つ”）から構成されている。そしてこのクラスターに含まれている事象の内容から考えると、被験者がより強い感情

2. ただし、Mikula (1986) の研究では異質な反応語が同じカテゴリーに入っている（たとえば、“狼狽”“奮い立つ”“そわそわする”“ドキドキする”が同じカテゴリーに括られている）こともあり、この分類方法にはいくらか問題があるように思われる。

的反応を示した不公正事象は、対人的な不公正に関する事象や、家族や職場での不当な処遇に関する事象、さらには手続き上の不公正に関する事象であるといえる。最近の社会心理学や産業心理学では、衡平理論に代表されるような分配や交換の結果に関する分配的公正よりも、決定や目的達成に至る過程に関する手続き的公正 (Lind & Tyler, 1988, 菅原・大淵訳, 1995; Thibaut & Walker, 1978) や、コミュニケーションや人と人とのかかわりに関する公正、すなわち相互作用的公正 (Bies & Moag, 1986; Bies & Shapiro, 1987) や対人的公正 (Greenberg, 1993; Tyler & Bies, 1990) が重要視される傾向にある。こうした研究動向と本研究の本調査の結果から考えると、今後は手続き的公正や対人的公正が達成されないときの感情的反応について詳細な検討が必要となるかもしれない。また、不当な対処・処遇に対する怒りの反応については、関連研究が必ずしも多くない(例外として, Folger, 1993; Folger & Martin, 1986; Folger, Rosenfield, & Robinson, 1983) ので、この点についても今後の課題として残されるであろう。

次に、第2、第3クラスターにおいては、いずれも金銭面・待遇面での不公平に関する事象が含まれていた。事象の内容については、第2クラスターは自己とほぼ同等な地位や身分をもつ他者との比較、あるいは自己を含む人々によって構成される内集団とそれとほぼ同等な地位や身分をもつ外集団との比較によって生ずる不公平を表す事象の集まりといえる³。一方、第3クラスターは自分よりもより高い地位や身分をもつ他者あるいは外集団との比較によって生ずる不公平を表す事象の集まりといえる。反応語に関しては、第1クラスターとは対照的に、強い感情を表す語はこれといって見出せず、第2クラスターには“狡さ”、第3クラスターには“不公平”と“むなしさ”を意味する反応語が見出された。前述したように、衡平理論においては貢献度に見合わない不公平な分配に対して、人

は強い怒りや憤りを覚えるとされている。しかし本研究の結果においては、不公平な分配や処遇に対してそれほど強い感情が引き起こされていたとはいえない。特に比較対象が自己よりも高い地位・身分にある他者であるときに生じる不公平に対しては、かなり無気力な反応(“あきらめ”、“仕方がない”)が見られた。また、比較対象が自己と同じような地位・身分にある他者であるときに生じる不公平に対してさえも、あまり強い感情が示されなかったことは意外な結果である。こうした結果が生じた理由としては、本調査での被験者が自分の経験した不公平な事象についてではなく、他者の経験した事象について第三者としての立場で評定したために、かならずしも目立った感情的反応が示されなかったのかもしれない。

引用文献

- Adams, J. S. 1965 Inequity in social exchange. In L. Berkowitz (Ed.), *Advances in experimental social psychology*, Vol. 2. New York: Academic Press. Pp.267-297.
- Baron, R.A. 1993 Criticism (informal negative feedback) as a source of perceived unfairness in organizations: Effects, mechanisms, and countermeasures. In R. Cropanzano (Ed.), *Justice in the work place: Approaching fairness in human resource management*. Hillsdale, New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates. Pp.155-170.
- Bies, R. J. & Moag, J. S. 1986 Interactional justice: Communications criteria of fairness. In R. J. Lewick, B. H. Sheppard, & M. H. Bazerman (Eds.), *Research on negotiation in organizations*, Vol. 1, Greenwich: JAI Press. Pp.43-55.
- Bies, R. J. & Shapiro, D. L. 1987 Interactional fairness judgments: The influence of causal accounts. *Social Justice Research*,

3. ただし、事象番号13だけは例外である。

- 1, 199-218.
- Buss, A. H. & Durkee, A. 1957 An inventory for assessing different kinds of hostility. *Journal of Consulting Psychology*, 21, 343-349.
- Clayton, S. D. 1992 The experience of injustice: Some characteristics and correlates. *Social Justice Research*, 5, 71-91.
- Deutsch, M. 1983 Current social psychological perspectives on justice. *European Journal of Social Psychology*, 13, 305-319.
- Ellsworth, P. C. & Smith, C. A. 1988 From appraisal to emotion: Differences among unpleasant feelings. *Motivation and Emotion*, 12, 271-302.
- フランク R. H. 山岸俊男 (監訳) 1995 オデッセウスの鎖 適応プログラムとしての感情 サイエンス社 (Frank, R. H. 1988 *Passions within reason*. New York: W. W. Norton.)
- Folger, R. 1993 Reactions to mistreatment at work. In J. K. Murnighan (Ed.), *Social psychology in organizations: Advances in theory and research*. New Jersey: Prentice Hall. Pp.161-183.
- Folger, R. & Martin, C. 1986 Relative deprivation and referent cognitions: Distributive and procedural justice effects. *Journal of Experimental Social Psychology*, 22, 531-546.
- Folger, R., Rosenfield, D., & Robinson, T. 1983 Relative deprivation and procedural justifications. *Journal of Personality and Social Psychology*, 45, 268-273.
- Graziano, W. G. 1987 Lost in thought at the choice point: Cognition, context, and equity. In J. C. Masters & W. P. Smith (Eds.), *Social comparison, social justice, and relative deprivation: Theoretical, empirical, and policy perspectives*. Hillsdale, New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates. Pp. 265-294.
- Greenacre, M. J. 1984 *Theory and applications of correspondence analysis*. London: Academic Press.
- Greenberg, J. 1993 The social side of fairness: Interpersonal and informational classes of organizational justice. In R. Cropanzano (Ed.), *Justice in the work place: Approaching fairness in human resource management*. Hillsdale, New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates. Pp.79-103.
- リンド E. A. & タイラー T. R. 1995 菅原郁夫・大淵憲一 (訳) フェアネスと手続きの社会心理学 - 裁判, 政治, 組織への応用 - プレーン出版 (Lind, E. A. & Tyler, T. R. 1988 *The social psychology of procedural justice*. New York: Plenum Press.)
- 井上正明・小林利宣 1985 日本におけるSD法による研究分野とその形容詞対尺度構成の概要 教育心理学研究, 33, 253-260.
- Lipkus, G. S. 1992 A heuristic model to explain perceptions of unjust events. *Social Justice Research*, 5, 359-384.
- Mauro, R., Sato, K., & Tucker, J. 1992 The role of appraisal in human emotions: A cross-cultural study. *Journal of Personality and Social Psychology*, 62, 301-317.
- Mikula, G. 1986 The experience of injustice: Toward a better understanding of its phenomenology. In H. W. Bierhoff, R. L. Cohen, & J. Greenberg, (Eds.), *Justice in social relations*. New York: Plenum Press. Pp.103-123.
- Mikula, G., Petri, B., & Tanzer, N. 1990 What people regard as unjust: Types and structures of every experience of injustice. *European Journal of Social Psychology*, 20, 133-149.
- Mikula, G. & Schlamberger, K. 1985 What people think about an unjust event:

- Toward a better understanding of the phenomenology of experiences of injustice. *European Journal of Social Psychology*, 15, 37-49.
- O'Malley, M. N. & Davis, D. K. 1984 Equity and affect: The effects of relative performance and moods on resource allocation. *Basic and Applied Social Psychology*, 5, 273-282.
- Prentice, D. A. & Crosby, F. J. 1987 The importance of context for assessing deservingness. In J. C. Masters & W. P. Smith (Eds.), *Social comparison, social justice, and relative deprivation: Theoretical, empirical, and policy perspectives*. Hillsdale, New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates. Pp. 165-182.
- Reis, H. T. 1984 The multidimensionality of justice. In R. Folger (Ed.), *The sense of injustice: Social psychological perspectives*. New York: Plenum Press. Pp. 25-61.
- スミス A. 米林富男 (訳) 1969 道徳情操論 (上) 未来社
(Smith, A. 1790 *The theory of moral sentiments*.)
- Smith, C. A. & Ellsworth, P. C. 1985 Patterns of cognitive appraisals in emotions. *Journal of Personality and Social Psychology*, 48, 813-833.
- 田中堅一郎 1990 報酬分配行動の規定因に関する多次元的研究 実験社会心理学研究, 30, 63-69.
- 田中堅一郎 1991 報酬分配様式を規定する要因選択の試み 一多次元の視座からの再検討一 日本大学心理学研究, 12, 20-27.
- 田中堅一郎・瀧本 誓 1994 公正判断に及ぼす対人感情の効果 日本社会心理学会第35回大会発表論文集, 462-463.
- Tanaka, K. & Takimoto, S. 1997 Effects of interpersonal affect on fairness judgment. *Japanese Psychological Research*. (In press)
- Thibaut, J. & Walker, L. 1978 A theory of procedure. *California Law Review*, 66, 541-566.
- 戸田正直 1992 感情 人を動かしている適応プログラム (認知科学選書24) 東京大学出版会
- Tyler, T. R. & Bies, R. J. 1990 Beyond formal procedures: The interpersonal context of procedural justice. In J. S. Carroll (Ed.), *Applied social psychology and organizational settings*. Hillsdale, New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates. Pp. 77-98.
- Walster, E., Berscheid, E., & Walster, G. W. 1976 New directions in equity research. *Journal of Personality and Social Psychology*, 25, 151-176.

付録 本調査で用いられた不公正事象の概要

第1クラスター

1. 近所にある店の店員は、主婦が買い物をしてお金を支払うと愛想がいいのに、若い人が買い物をしてお金を支払っても“ありがとうございます”の一言も言わない。
2. 学校でいきなり教室での飲食が禁止になった。われわれ生徒には何の前触れも話し合いもなく、学校側で勝手に決められた。
3. 飲食店で多くの客で込んでいる時間に慣れないレジの仕事を手伝っていた。その日の閉店時の清算で勘定が合わなくなったとき、店長が他の人には何も言わず、わたしに向かって“まあ初めてだからしょうがないけど、今度から気をつけてね”といった。わたしをレジのキーを打ち間違えた犯人と頭から疑ってかかった。
5. わたしの勤務先の先生 (歯科医) が、人によって態度を変える。たとえば、歯科助手が同じ失敗をしても、ある人には厳しく注意するが、別な人には軽く言うだけだったりする。
6. ある会合へ出席することになった時に、一

緒に参加する連絡係のAさん（女性）に“どんな服を着て出席するの？”と尋ねたら、Aさんは“白のブラウスに紺のスーツ”と答えた。そこでわたしもその通り着ていった。当日、Aさんは紺のジャケットに、白のブラウスでなくラフな服（Tシャツ）を着てきた。同じようにラフな服を着ていたわたしの知人のB（女性）に尋ねてみると、“Aさんがラフな格好で出ると行ったから”と答えた。AさんはわたしとBに違ったことを言って平気な顔をしていた。

8. 同じ時間、同じ時給でアルバイトをしているのに、自分ばかり仕事をさせられた。他の人は座っていてあまり仕事をしていないのに。
9. 電車の順番を皆が並んで待っているところに、横から割り込みをする人がいる。
10. わたしの母が14年間勤めていた事業所は、労働基準法に引っかかってもおかしくないくらいひどい待遇（残業時間が勤務時間として含まれていない、男性は賃金アップがあって女性にはない等）だった。そこで、わたしの母がそのことを上司に言いに行ったら、そのことがさらに上の上司に伝わって、最終的には所長が遠回しに母に仕事を辞めるように言ってきた。
12. 政治家は選挙演説の時にはいくつも公約を並べ実現させると約束しながら、いざ当選すると何の努力もしていない。
16. 本人がいないときに、その人に対してこそそ文句を言っていること。
20. わたしが“マクドナルド”のアルバイトで、ディスカウント・クーポンを配りに行ったとき、わたしの割り当てが一番多かった。配り終わって店に帰った時間が、一緒に配っていた他の人よりもずっと遅くなった。
21. 家族の人がわたし宛に届いた手紙を勝手に開けて読んだり、広告の入ったわたし宛のダイレクトメールを勝手に捨てたりした。
26. わたしがアルバイトにいつている店の店長は、自分の不倫相手である女の従業員が何をしても文句を言わないのに、私たちが仕事

中雑談しているととても怒る。

30. わたしの学校のE先生は気分・機嫌の変化が激しく、そのため時間や日によって生徒に対する態度が大きく違う。
31. わたしが所属している団体では、担当の係を幹部の人たちが勝手に決めて、わたしたち一般の団員の希望を無視している。
33. わたしの寮内で、鍵をかけ忘れた部屋の冷蔵庫にあった食品や実家から送られてきた荷物がしばしば盗まれた。
34. わたしの友人はある病院の事務職員として就職したのだが、職場での実際の仕事内容は看護助手と同じだったそう。休日日数や給与も求人票に書かれていたものとはかなり違っていたようだ。

第2クラスター

4. わたしの通っている専門学校では“基礎〇〇技術”という名前の授業があるが、理論を教える講義ばかり続いていて、実践的な演習がない。昨年まではかなり演習を行っていたらしいし、他の学校ではこれと同じ名前の講義で毎週技術的な演習をさかんにやっているらしい。
13. “国会中継”を見ていると、国会議員は居眠りをしたりぼーっとしていたり、野次ばかり飛ばしたりして真面目に仕事をしていないのに、高い給料をもらっている。
17. 英語の授業で定期的に行われるテストで、わたしは先生のすぐ前にいて真面目に受験して40点くらいなのに、教室の後ろの方に座っている人の中にカンニングをして90点くらい取っている人がいる。
18. わたしの勤務する整形外科の病院では、受付とリハビリテーションのパート就労がある。受付の仕事はほとんど座っていてとても楽だが、リハビリの仕事は立ちっぱなしで患者さんともコミュニケーションをとったり、機械の操作をするなど仕事が多い。それなのに同じ時給だ。
28. わたしの住んでいる寮の管理人は、日頃か

ら門限時間に厳しいのに、自分と仲のいい人だと門限後でも文句も言わずに門を開ける。

29. わたしの母は、妹のわたしには小遣いをくれないのに、兄は社会人でお金をもっているにもかかわらず、車の車庫代や事故の修理代もほとんど出している。

第3クラスター

7. ある高校で、一人の生徒の持ち物が紛失した時に、某先生は生徒全員に対して突然“持ち物検査”を行い、疑いの目を向けた。
15. 女性が企業などに就職しても出世できない。女性が採用されても、どんなに有能でも昇格させるポストがない。
19. わたしの寮では、上級生は試験の期間中は掃除をしなくてよい。けれども、わたしたち下級生は試験期間中でもイベント期間の時でも掃除をしなければならない。
22. 宝くじはたくさん買った方が当たる確率が高い。だが、たくさん買うにはお金がいるので、たくさん買えるお金持ちの人の方が当たる確率は高くなる。
25. わたしと兄とで2つの部屋（洋間・和室）のどちらに住むか決めるときに、母から“兄さんの方に広い洋間をあげなさい。そうしないとこれからあなたのことは取り合わない。”といわれた。それで、わたしは少し小さい和室で9年間過ごした。

第4クラスター

14. わたしが可愛がっていた犬の様子がおかし

いので、病院に連れていったところ、獣医にこれは悪性腫瘍で手の施しようがないといわれた。どうしてわたしの犬に限ってこんな病気で死ななければならないのだろう。

24. わたしの学校の職員は、非常勤で来ていただいている講師の先生に対して、地位や身分によって接し方が違う。
32. FさんとDさんとが喧嘩をした。どう見ても、Fさんの方に非があると思われたが、FさんはDさんに謝りもせず、自分の友だちをみんな味方にしてDさんを仲間外れにした。
35. 同じマンションに住んでいる人に、毎朝わたしが“おはようございます”とか挨拶をしても、何も言わないで行ってしまう人や視線をそらしていく人がいる。

第5クラスター

11. “ケンタッキー・フライドチキン”の店員の女の子が、アルバイト仲間の女の子が店にやってきたとき、1品の値段でチキンやポテトフライをつけて対応していた。
23. わたしが高校生の時、D君はM工業大学に9月に指定校推薦試験に合格した。その後、彼はたびたび授業をさぼって渋谷などで遊んでいて、案の定そのことが先生にばれてしまった。けれども、結局D君はそのままM工業大学に推薦された。
27. 学校の期末試験で、ある試験科目の過去に出題された問題とその解答が出回り、それが手元に渡った人は試験の前日に勉強しただけで合格点をとった。